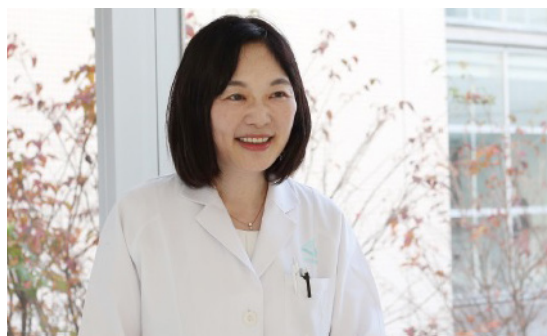


先輩医師からのメッセージ

脳・神経・遺伝子を通して、 全科の結節点として、患者さんと向き合う

脳神経内科学教室教授、遺伝子診療センター長
市川弥生子 先生



いちかわ・やえこ

1990年、筑波大学医学専門学群卒業。92年、東京大学医学部附属病院神経内科。2000年、東京大学大学院医学系研究科博士課程修了(脳神経医学専攻)。日本学術振興会特別研究員。01年に川崎医科大学、04年に東大病院の神経内科に勤務。14年～杏林大学医学部神経内科。20年、日本女医会第5回学術研究助成「溝口昌子賞」受賞。

問診と診察を重ね、論理的に診断を導き出す

脳神経内科では、脳や脊髄、末梢神経、筋肉といった神経系が関与している臓器全般を診療します。扱う病気は、頭痛、認知症、脳卒中といった身近な病気から、筋萎縮性側索硬化症などの神経難病まで多岐にわたります。

大学時代を過ごした1980年代は、まだ脳神経内科学教室がある大学は少ない時代でした。大学入学時、私は神経内科という言葉も知りませんでした。4年生の授業で初めて脳神経内科学を学んで、とても面白いと思ったのがきっかけで、専門にしたのです。例えば体を動かさず、感じる、あるいは考えたり覚えたりすることがうまくできないというときには、特定の脳・神経系がうまく働かなくなっている。その原因を明らかにしていくのが脳神経内科学です。

脳神経内科医は、ハンマーと呼ばれる打腱器や音叉、爪楊枝、筆、ペンライトなどを使って感覚や運動機能などを診ていきます。神経診察と言います。このような専門的診察とともに重要なのが問診です。例えば、ふらつくという症状にしても、どういうときにそうなるのか、過去にどんな病気をしてきたか、遺伝性かもしれないのでご家族のことなど、さまざまな情報を引き出していく必要があります。コミュニケーション力が必須なのです。問診と診察を重ねて論理的に診断を進めていけるところが、脳神経内科の一番の魅力だと私は思っています。専門的診察や考え方をいったん身につけると、ライブイベントで中断しても第一線に復帰しやすい分野です。

全ての臓器に神経が通っているため、全身を診て病態を考え、全科と連携していることも脳神経内科診療の特徴です。杏林大学の脳神経内科では、コンサルトチームを結成し、院内全科からのコンサルテーションを受けています。



診察道具

継続することで点を線に、そして面へ

他科との結節点の役割を果たしている脳神経内科ですが、私が医師となった頃は、有効な治療薬も少なく、なおせない病気をみる診療科という認識をもつ方も少なくありませんでした。女性の脳神経内科医も少なく、大学教員となるとさらに少なくなる。その認識・状況が大きく変わったのが、この30年間です。最近では多発性硬化症などの神経免疫疾患の治療薬が次々と開発され、臨床応用された核酸医薬の大半が神経系の病気に関連する薬です。

その中で、私自身はサブスペシャリティーとして遺伝性疾患を研究しています。脳神経内科では、原因不明の遺伝性疾患を診ることもあり、遺伝子レベルで追及してみたいと思ったのです。大学院で最先端の遺伝子研究に触れ、基礎研究と臨床の橋渡しをしたいと考えるようになりました。それで、大学院の間に遺伝医学全般についても学び、臨床遺伝専門医も取得しました。



今、個別化医療が進んでいます。遺伝子情報をもとに、一人ひとりに合った治療法や薬などを選択していくことから、「オーダーメイド医療」とも呼ばれています。通常の保険診療で遺伝子検査が可能な病気も増えてきました。このような背景から、杏林大学病院でも、このたび遺伝子診療センターを設置し、ゲノムレベルでの個別化医療を提供する全科横断的な体制を整えつつあります。臨床遺伝専門医として、がんや遺伝性疾患をみる診療科の先生方と関わり、遺伝カウンセリングも行っています。遺伝子診療の全診療科への広がり、私が専門医を取得した約20年前には想像もしなかったことです。

興味を持ったことはやってみることです。私自身がそうでした。高校時代に「生命のらせん階段—分子生物学への道」という渡辺格先生の研究自叙伝を読み、生命科学に興味を持ったのが始まりでした。企業の研究所に勤めていた父に相談すると、医学部で研究してはどうかと勧められたのです。そういう道があるのかと思って進んだ医学部で脳神経内科に出会い、その臨床がおもしろくなり、遺伝子レベルの診療・研究にも携わりながら、今に至っています。私の経験から言えるのは、勉強も、診療も、研究も、一つひとつ熱心に継続していったほしいということです。若い頃は今やっていることが後にどうなっていくのか分からないもの。続けていると点に過ぎなかったことが線として結ばれ、面へと広がっていく。なおせなかった病気が、なおせるようになる。脳神経内科のこの30年間の進化と深化、さらに広がり、まさにその証しだと思うのです。長い目で見て、進路を選択し、経験を積み重ねていってください。興味から始まったのですが、患者さんも含めてさまざまな方々との出会い、ご縁があり、同じ医療に携わる仲間や指導者にも恵まれました。医師にとってスキルや知識はもちろん重要ですが、人と相対していく仕事なので、その基盤となるコミュニケーション力が道をひらいてくれると思います。

本文：杏林大学医学部附属病院 医師ロールモデル集 [アンズ] vol.4 (2022年2月発行) より

脳神経内科医のキャリアパス

脳神経内科医には、ジェネラリストとスペシャリストの両側面があります。頭痛、しびれ、筋力低下、歩けない、認知症かも、といったコモンな訴えで、脳神経内科の初診外来を受診される方がほとんどです。訴えの原因となっている病態は何かと考え、診断・治療につなげていきます。近年、抗体医薬や核酸医薬が次々と開発されており、杏林の脳神経内科でも新しい治療を取り入れています。

学生の皆さんが活躍する時代には、脳神経内科の診療は大きく進歩していることでしょう。全身を診る脳神経内科医は専門性を持ちつつ総合診療医として活躍することも可能であり、多様なキャリアパスが広がっています。神経内科専門医を取得後は、病院や大学院で研鑽を積むほか、クリニックの開業や、在宅診療医の道に進む方も増えています。興味がある方は、気軽にお声をかけてください！

遺伝子診療センターについて

杏林の遺伝子診療を推進する目的で、2021年11月、遺伝子診療センターが発足しました。2022年4月からは常勤の認定遺伝カウンセラーも着任し、本格的な活動を開始しています。臨床検査部、各診療科と連携して、遺伝学的検査および遺伝カウンセリング体制を整えています。

遺伝子診療は、すでに日常診療の一環となっています。遺伝子型の情報をもとに治療薬・投与量を選択することは、多くの疾患で行われています。通常の保険診療で遺伝学的検査を行える疾患も年々増えており、現在200近くあります。個別化医療や病気の予防に向けてゲノム医療が急速に発展しています。今後の診療においては、遺伝や遺伝子解析結果を理解するスキルが求められます。そこで、杏林大学では2024年度からM3において遺伝医学の講義が始まります。基礎医学で学ぶ遺伝やゲノムに関する知識・考え方が、様々な分野で臨床応用されていることを実感できると思います。

遺伝子診療センターでは、毎月 Genetic Board(GB) を開催し、症例の検討および疾患に関するミニレクチャーを行っています。がんから多臓器にわたる稀少な遺伝性疾患まで、臨床遺伝専門医・認定遺伝カウンセラーを含む多職種で検討しています。遺伝性疾患の相談や、遺伝子診療について興味がある方は、お声をかけてください。これまで、診療科の医師ばかりでなく、クリクラの学生さんや研修医の先生方も GB に参加されています。

杏林で、臨床遺伝専門医の取得を目指すことも可能です。どの診療分野でも、需要が高まっている専門医資格です。チャレンジしてみませんか？

■遺伝子診療センター Web サイト

The screenshot shows the website for the Genetic Medicine Center at Kyorin University Hospital. The top navigation bar includes links for 'よくあるご質問', 'お問い合わせ', '院内プロフィール', and language options 'Japanese' and 'English'. Below the navigation is a search bar with 'Google 検索' and a search icon. The main content area has a header '遺伝子診療センター 概要・特色' and a sub-header '— 診療科長からみなさまへ'. A portrait of Ms. Yashiki Yoko is displayed, with her name and title 'センター長/教授 市川 弥生子' below it. The text next to her portrait describes the center's mission and services.

当科の特色

杏林大学医学部付属病院は、総合周産期母子医療センター、がんゲノム医療連携病院、東京都難病診療連携拠点病院の指定を受け、地域の皆さまに専門的な医療を提供する体制を整えています。遺伝子診療に関しても、出生前の相談から、小児・成人期の遺伝性疾患、がんゲノム医療まで幅広く対応できることが特色です。

当センターは、臨床検査部と連携して、遺伝学的検査や遺伝子解析の実施が可能です。臨床遺伝専門医・認定遺伝カウンセラーが、各診療科の担当医とも連携して遺伝カウンセリングを行い、その後の医学的マネジメントも遺伝子診療の情報提供を行っています。